

フランスにおけるアラブ系移民の同化 ～マグレブ移民のフランス社会への同化の軌跡から次世代の移民を考える～

毛利 恵美

フランスの大きな社会問題の一つに移民問題がある。移民は現在フランス人口の7,4%を占めている。この現実を知ったのは私が始めて短期留学のために渡仏した時だった。まだフランス語が上手く話せず聞き取ることもできなかった当時でさえも、フランス人と移民の間の確執は街を歩くとなんとなく感じていた。それ以降、移民の問題がよく耳に止まるようになり、彼らの同化問題に興味を持つようになった。特にマグレブ三国（チュニジア・モロッコ・アルジェリア）出身の移民が移民問題の中心に据えられていることが多かったので、自然と私の興味は彼らへと向けられた。そして様々な問題を知るうちに、移民の同化問題は経済、教育、福祉などある一つの分野を取り出して考えることが出来ないのではないかと思うようになった。各分野の問題はそれぞれに結びついており、移民がフランスにやってきた頃からの移民の歴史を辿ってみることで、この問題の全貌が見えるのだと考えた。本研究の目的は、マグレブからやってきた労働者移民を世代ごとに分けて彼らの生活が抱える問題、各世代のアイデンティティーの変容を考察し、今後の移民がフランスと共生していく上で必要な要素を導き出すことである。

第一章では祖国の文化を維持し続ける移民第一世代について述べている。1950年代後半からフランスは「栄光の30年」と呼ばれる高度経済成長期を迎える。戦後の復興期を経て、フランス社会では景気の回復とともに建築業や自動車などの製造業に活気が甦り、労働者の需要が高まった。同じ時期、移民の送り出し国では働き先が十分に無く労働力が余っていた。一人でも食い扶持を減らすため、お金をかせぐため、彼らはフランスに労働者移民として渡った。このようなフランスと移民送り出し国との需要供給の関係によって移民とフランスとの労働者移民の行き来の関係が出来上がる。この関係を壊したのは、栄光の30年が終わり労働力が要らなくなったことにより、移民の受け入れをやめて帰国を奨励する1974年の新規移住労働者受け入れ禁止の政策である。この政策以降、移民は家族を呼び寄せ、定住化を始める。これにより移民問題は、経済問題だけにとどまらず、生活していく上で、特に文化間の差異による衝突によって様々な問題を生み出した。定住化を決めた移民にとって仕事は単なる金儲けの手段ではなく、地位の象徴、社会の中での彼らの位置の標識となった。そして彼らは生活の質の向上を望むようになった。しかしもともと建設現場や工場における低賃金肉体労働のために雇われた彼らには職場でのフランス人との接触機会が無く、フランス語の能力や学歴、特殊技能は備わっておらず、社会の中で最下位層に位置付けられ、偏見や差別の対象とされた。また60年代に移民の大量流入によって住居不足が生じ、フランスは一時的な「仮住まい」を提供することでこの事態

を回避しようとしたが、政府はこの地区に体育館や職業訓練施設などを建設し、一時的な「仮」であったはずの団地に移民を定住させることになった。このように移民たちはまとめて移民地区に居住するようになる。その中で移民たちは仕事や給料の不満、日常生活の中での問題店、祖国に残してきた家族に関して、子供の養育に関する話をした。彼らの生活は異国で生活するために形成したまとまりの中で、役割を決めてフランス社会とは離れた存在となって生活している。

このような彼らの生活環境は彼らに絶望感を与え、フランス人やフランス社会への憎悪を掻き立てている。彼らのうちの大部分は、フランスで成功して国に帰ろう、退職したら帰国しようと思っている。そんな人たちにアイデンティティーの変容は見出されない。また彼らには祖国との手紙や電話での強い結びつきが存在しており、フランスで生活しながらなお、祖国の影響を直接彼らの家族、親戚から受けており、彼らがフランスで構成する家族関係は祖国のものと全く同じ立場関係にあり、夫が外で家族の代表としての顔を持ち妻は家族の世話をするという祖国の伝統的な家族構成員の立場のもとに生活していた。以上のことからフランスで定住すると決めた後でさえもなお、移民第一世代のアイデンティティーは祖国に依存しているといえるだろう。

第二章では、そんな移民第一世代の両親の間に生まれた子供、移民第二世代の、両親の祖国とフランスの文化に挟まれている現実を明らかにした。両親たちが形成した移民地区はゲッター化の道を辿っており、社会的孤立が進み、この地区内での失業率の高さ、居住環境の悪さ、学校レベルの低さは大きな問題となっている。そしてこの地区では同化を図ろうとする若者に対して伝統的な規律でもって接する両親の移民第一世代の存在も彼らの同化に大きく影を落とす。彼らはフランスで生まれ育ち移民第一世代よりもフランスへの同化は進んでおり言語問題や分化的差異への問題もさほどないが、移民の子であることが職探しの上で非常にハンディになっていたり、教育市場の差別によって学歴に関係なく下のレベルのクラスに入れられてしまい、自分が不出来であると思ってしまう子供がいたりなど、フランスからの移民の差別が障害となっている面もある。また、彼らの社会進出の基盤となる教育においては、家庭で彼らの勉強を見てあげなければならないはずの両親に教養がないこと、また子供の教育への理解が欠如していることからとくに娘に対して家の仕事をまかせてしまうなど、子供にとって勉強できない生活環境がハンデとなっている。このような生活状態の中で移民第二世代のアイデンティティーは分化をし、同化をすれば自由で平等な権利が得られるというフランスの建前と上記のような差別の現実の違いに失望し、両親の祖国にアイデンティティーを求める者、宗教活動によって新たな自分の存在価値を見つけるものが現れる。ただ、上手くフランス社会に同化している者もいることは確かで、彼らの多くは社会的地位を得た者、ゲッター化地域を抜け出した者である。

第 3 章では以上のことを踏まえた上で、次世代移民が今後フランス人とうまく共生して

いくのこれから必要な取り組みについて調べてみた。まずは腐敗した移民教育の建て直しについて考える。これについては CEFISEM という移民の教育の関係者を教育することで教育の諸問題に対応する組織の今後の展望が私の考える今後の移民教育に必要な要素を代弁してくれている。つまり、この組織は「移民」という枠で彼らに対応する人々をくくってしまうことが時代遅れだと考えており、今後は「移民の問題」を解決へと導くのではなく、「言語的・文化的な面において学業困難に直面している子供の問題」と捉えることで、移民という概念そのものを無くそうとしている。そして文化的に多様な子供たちの学業成功は、受け入れ社会の文化と家庭でのバランスによって決まることから、移民家庭と連絡を密にとること、各家庭が持つ文化的な特殊性を考慮できる教員の輩出が今後必要だと考える。

また郊外の移民地区に対する構造改革も移民のフランスとの共生の道には欠かせない要素である。そのために私はフランスの援助は必要不可欠だと考えており、2002年に誕生した保守政権によってカットされてしまった地域福祉や教育支援団体への補助金、移民に身近であった地域警察の再配備をもう一度見直す必要があると思う。またゲットー化を食い止めるためには、かつてきちんと機能していたフランス社会と移民社会をつなげる住民組織を復活させることが考えられる。

最後に移民の雇用問題への取り組みが彼らの社会進出を後押しする重要な要素だと思われる。仕事でのポスト獲得の為に必要になる教養をつけたり資格を取得することは必須であるが、これは先ほど挙げた教育問題によって解決されていくことを望む。また雇用者側の対応として、これまで政府や企業は移民への差別の実態を認めることはほとんどなかったのだが、10月27日の移民の2人の子供の死亡事件を発端にした相次ぐ暴動事件へのシラク大統領の演説でその差別の実態について言及し、現在の履歴書の匿名化への動きにつながっていることから、これをフランスの移民との共生への道の大きな一歩として捉え、今後の雇用の問題に対して私はこれから良い方向に向かっていくのではないかと考えた。

以上のように移民の問題は時代と共に変化をし、対象となる移民自体も変化をしている。もはや移民に同化を求めることは時代遅れだという考えは周知の事実であるが、では今後どのように共生をさせていくのか、という具体的な政策、ビジョンが現在のフランスには欠けているように思われる。移民問題は彼らの文化的不適応から生じるものが多かったが、定住化を始めた彼らを以前の労働のためだけに渡仏してきていた移民同様に扱ったフランスの対応から現在ある全ての問題が派生してしまったように感じた。今や移民は第二世代、第三世代まで来ている。この問題が今後も続かないためには、フランスがもう一度、過去の政策を評価しなおし、そこから現実にも即した政策を考えることで移民との共生が図られることを期待している。